

目次

過去6年の「標準解答例考察」再検証	2
1. 平成21年	2
データから読み取れること	2
計画の要点の位置付け	2
多様なスパン割り	2
2. 平成22年	3
データから読み取れること	3
標準解答例2例の特徴	3
考え方の改変	4
記述の重視	4
3. 平成23年	4
データから読み取れること	4
標準解答例2例の特徴	4
減点における考え方の改変	6
記述の重視	6
4. 平成24年	6
データから読み取れること	6
標準解答例2例の特徴	6
分野ごとの難易度	8
記述の特徴	8
5. 平成25年	8
データから読み取れること	8
標準解答例2例の特徴	8
分野ごとの難易度	9
採点における傾向	10
6. 平成26年	10
データから読み取れること	10
標準解答例2例の特徴	10
分野ごとの難易度	11
採点における傾向	12
7. 各考察の検証	12
記述の重視	12
減点における考え方の改変	12
標準解答例の位置づけ	13
今後のエスキスの方向性	14
1. イメージゾーニングにおいて	14
2. 建築可能範囲において	14
3. スパン割りにおいて	15
4. プランニングにおいて	15
5. 記述との関連	16
1) 曖昧条件の解決	16
2) エスキスとの並行作業	16
3) 記述の高配点	17
参考資料：標準解答例の平面図概要（平成21年～）	18

3) 記述の高配点

平成 21 年以降の再現図添削において、合格者と不合格者のボーダーラインを精査した結果、以下の傾向が判明している。

一次採点の足切り点はそれ以前よりも下がっており、70 点前半半 / 100 満点であったものが 60 点台後半となっている。また、二次採点（記述＋図面印象点）の一次採点（図面）に対する配点比率は、0.8 ～ 1 : 1 と考えられる。

Ⅲ類とⅣ類を除いた後の合否（Ⅰ類またはⅡ類）は、一次得点と二次得点の総合計をもって判断されることから、Ⅰ類合格者の中には図面得点で余裕をもって合格点を上回る者（一般受験者）と、一部ではあるが図面はボーダーラインぎりぎりでも記述で得点を稼ぐ者（設備設計者等）に別れる。

対策 1：全ての受験者にとって記述点の積み増しが重要であり、記述時間確保のため、標準解答例を最低限の図面表現にとらえた上、作図時間の短縮。…「記述における対策」を参照。

対策 2：一般受験者にとっては、構造・設備分野の学習と自案に即した記述の訓練が重要であると同時に、自分の得意分野（つまり図面）での得点積み増しも合わせて狙えば効果は高まる。従って、エスキス構築の過程で 2) の太字構文の確認が有効となろう。

例 1：基準階を回廊形式とするため PC 梁による長スパンを導入
 →療養室界壁を利用した EW 配置。ただし直行方向には配置できない。
 →純ラーメンで対応（梁幅の確保）⇒大梁の符号を増

例 2：2 階収蔵庫は 24 時間稼動のため単独の単一ダクト方式
 →機械室から遠く、機械室面積も充分でない。
 →屋上に屋外設置型の収蔵庫用 AHU（エアハンドリングユニット）を置く。

例 3：図書館にあっては隣接する公園（西・北）の景観を導入するため主な居室をこれに面する
 →西日はグレアの原因となり書籍の劣化につながる
 →建物西側には縦型ルーバーを設置し、敷地内屋外に樹木を配置し南からの光は乱反射光を導入しから西日は遮蔽する。

対策 3：不合格となった設備設計者の場合、エスキス初段階でのイメージゾーニングの選択からプランニング完成までに時間がかかり、図面・記述に十分な時間が確保できない傾向にあるようだ。従って、専門以外（計画、構造）の基礎トライアル、対策課題のエスキス訓練、オーソドックスなエスキスの手順等の学習から始めるとよいだろう。

対策 4：平成 24 年においては、一次（図面）得点のかなり高い人でもⅡ類となった例が見られることから、Ⅰ類とⅡ類を分ける判断材料として、二次採点における単独の足切り点が存在する可能性が推察される。従って、過去の本試験でⅡ類となった人は早い段階での 21 年以降の過去課題、または対策課題を行い添削を受けることをおすすめする。